

〈論文〉

蒙古軍政府成立前後における関東軍と徳王による募兵工作

The Enlistment Activity of Soldiers by Kanto Army and Tokuou at the Opportunity when the Government of Mongolian Army was Established (May in 1936)

白 那日蘇

Narusu HAKU

I はじめに

1932年、中華民国東北部に日本の傀儡政権である満州国が「建国」され、内モンゴルのフルンボイル地方、ジリム盟などの地域もこの国に包含されることになる。翌1933年には関東軍の熱河作戦によって熱河省（清代のジョスト盟、ジョーウダ盟）が併合され、同じく満州国治下となる。

一方、西部内モンゴルのシリングル盟スニト右（西スニト）旗旗長であって1924年にシリングル盟副盟長を兼務することになった徳王（ドムチョクドンロブ郡王）がモンゴル民族の自治独立を呼びかけ始めると、内モンゴルのモンゴル人の中で強い影響力を持つようになる。徳王による民族自決運動は、1934年の百靈廟蒙政会成立から始まって蒙古軍政府（1936年成立。以下同様）、蒙古連盟自治政府（1937年）、蒙古聯合自治政府（1939年）、蒙古自治邦（1941年）という一連の政権（一般に蒙疆政権と略称される）の変転の下で行われることとなる。

そして、その過程で1936年4月から8月の間、関東軍の板垣征四郎参謀長の¹主導によって、満州国領内の熱河省方面からモンゴル人兵士を募集して徳王の蒙古軍政府の正規軍として編成するための募兵工作が実施された。板垣征四郎は煙草谷平太郎（たばこやへいたろう）を蒙古軍主席顧問に任命して、ドロン（多倫）での蒙古軍部隊の編制を命じた。同年4月、煙草谷は徳王の部下である蒙古軍政府の宝貴廷少将とともに承德特務機関の一室に募兵司令部を置き、熱河省と興安西省で募兵を開始した。²すなわち徳王自身もこの募兵工作に当初から深く関わっていた。本研究では、この関東軍と徳王による募兵工作の実態と歴史的な意義を解明する。

II 先行研究及び使用史料

2.1 先行研究の概要

まず、徳王と李守信に関する研究があげられる。例えば、徳王に関する代表的な研究である森（2000）

1 板垣征四郎は、1934年12月から1936年3月まで関東軍参謀副長、同月から1937年3月まで同参謀長であった。

2 森（2000：132）等を参照。

が、蒙疆政権の軍事組織も研究している。森（2000）の「関東軍の内蒙工作」部分では、関東軍がいかにして熱河作戦を進め、李守信の部隊をいかにして蒙古軍政府の部隊へと編成したかということが書かれている。また、楊（2018）では、文史資料である『徳穆楚克棟魯普自述』、『李守信自述』、『偽蒙古軍史料』（後述の史料④）を利用して李守信の個人史が書かれている。しかし、いずれも人物研究中心であるため、募兵工作については簡略に書かれているのみである。

次いで森（2009）も、徳王による募兵に関して例えば、西部内モンゴルのシリングル・チャハル両盟が人口希薄であって、比較的人口の多いウジュムチン旗でさえ兵士の募集にあまり熱意がなかったため、満州国の東部内蒙古で兵員を募集することになったと述べている。「徳王自述」（後述）に基づいて、募兵のために宝貴廷と烏雲飛をジョソト・ジョウウダ両盟へ派遣し、包悦卿をジリム盟へ派遣したことも述べ、煙草谷平太郎が熱河省、興安西省で募兵を開始して、5000人の兵士を集めたことも短く述べている。しかし、やはり実証的な研究とは言い難い。

一方、最新の研究である及川（2019）は、奉天軍との関係から説き起こして満州国軍の発展と崩壊を論じ、1940年に満州国で公布された「国兵法」を取り上げることによって、同法が満州国軍にとってどのような意義を有していたかという新たな問題を提出した。この研究は特にその第二章で満州国軍においてモンゴル人に対する期待が大きかったという問題を取り上げている点が重要である。日露戦時の特別任務班でモンゴル人を利用した経験から日本側がモンゴル人の戦闘力、体力などの詳細な調査まで行っていたという事例を取り上げ、「尚武の民族」であったモンゴル人に期待していたことを明らかにした。また、満州国の「建国」はソ連及び中国によって分断状態にあったモンゴル人の統一、民族自決を支援するという論理のもとに進められたと述べ、その延長線上に立って兵力源としてのモンゴル人に期待したと論じている。満州国の「国兵法」もモンゴル人が主たる対象であって、人口比率で見るとモンゴル人の徴兵負担が漢人よりはるかに重かったと述べている。そして、兵役負担が社会的影響力の高いラマ僧にまで及んでいたことも指摘した。ただし、さすがにモンゴル人の民族自決へのナショナリズムを日本側が利用した実例を検証するまでには至っていない。したがって本稿での検証は、及川（2019）で示された日本側によるこのナショナリズムの利用例を実証するという意義も有することになるであろう。

2.2 本研究で使用する史料

本研究では、主に以下の9種類の史料を利用する。

史料① 春日行雄（かすがゆきお）編纂（2004）『蒙古軍史稿』の中に収録された煙草谷平太郎自身による手書きの回想録「関東軍内蒙工作」。この『蒙古軍史稿』全体がゼロックスコピーによる複写本であり、「関東軍内蒙工作」の部分は下記史料②の後半部分を煙草谷自身が改めて書き直した上で編纂者春日に提出したものである。史料②を訂正したと見られる部分もあるため、こちらの方が史料的価値はやや高いと思われる。この史料『蒙古軍史稿』は、昭和15（1940）年8月～20（1945）年8月15日において、当時の内モンゴルの官衙、部隊、学校などに務めていた日本人の記憶をもとにまとめた蒙古軍に関する回顧録である。未出版史料であるが、筆者の調べたところでは、東京外国語大学図書館に所蔵されている。この「関東軍内蒙工作」の中に1936年4月から6月下旬まで満州国の熱河省方面で実施された募兵工作のことも記録されている。蒙古軍政府成立前後の募兵工作について現存するほぼ唯一の史料である。本回想を煙草谷平太郎は、「その儘の事実をそのままの気持ちで書きました」と自ら記述している。当事者の残した回想録であるから、批判的に扱う必要があるこ

とはもちろんであるが、その一方で当事者にしか知り得ない事実も大量に含まれている。例えば、当時の内外モンゴル、日本、中国、ソ連などに関して煙草谷等日本側の関係者がいか様に理解していて、募兵工作がいかなる時代背景のもとで行われ、さらに、煙草谷等の実施者がいかなる意義を持つと考えていたのかが詳しく書かれている。募兵工作は全て秘密裏に行われたため、その関連史料は現地においても発見し難い。それゆえに、煙草谷平太郎のこの回想は、非常に価値が高い。募兵における煙草谷の役割は大変大きかったが、彼の一番の功績は貴重な回想史料を記録し保存したことにあるとも言えよう。

史料② 防衛省防衛研究所所蔵史料 文庫 - 依託 - 325 「熱河作戦以後の満軍指導と蒙古工作（綏東事件）一元満軍指揮官 煙草谷平太郎」。この史料は煙草谷平太郎が自分自身の経歴を記録した回想史料である。この史料に書き加えられた後述する説明によると、香川県高松市の出身であった煙草谷平太郎は陸軍士官学校 29 期生であり、軍縮の時に現役をやめて満州国に入り、満州国軍の張海鵬⁴の第三支隊の軍事指導を担当したという。後述するように、煙草谷は熱河占領作戦で活躍して、日本と中華民国との間で土肥原・秦徳純協定⁵が結ばれた時にも功績があった。そして昭和 10（1935）年 8 月から板垣参謀副長の懇望によって、新しい蒙古軍の募兵と編成、綏遠事件に於ける戦闘指導にあたったという。

本史料全体が万年筆で書かれており、前半の「満州国の部分」と後半の「蒙古の部分」という二つに分割されている。「満州国の部分」は、満州国軍の第三支隊を率いて通遼から進軍し、関東軍第六師団とともに熱河作戦に参加したことから始まり、1935年6月27日の土肥原・秦徳純協定⁵が結ばれるまでの記録である。第三支隊による隆化城の占領、匪賊王二虎の部隊との戦闘、豊寧城攻略戦、承德入城などの軍事行動や途中での出来事を記述している。「蒙古の部分」は史料①の「関東軍内蒙工作」とほぼ同じく募兵工作から蒙古軍の編成、綏東作戦、綏遠事件までのことを記している。内容は史料①とほぼ同じであるが、文章は異なっている事が多い。史料②には史料①に書かれていないことが書かれている場合もあるため、両方参照する必要がある。

史料③ 香川県立図書館所蔵の煙草谷平太郎自身による手書き自叙伝『一生浪人の一生』1-7 巻⁶。この内の内モンゴルに関する部分は、史料①、史料②で煙草谷平太郎が記述した部分とほぼ同じ内容であるが、その前後の部分には、ここからしか知り得ない情報が多く含まれている。

史料④ 『内モンゴル文史資料』シリーズの『徳穆楚克棟魯普自述』（第 3 輯 1979 年、内蒙古人民出版社。第 6 輯 1979 年、内蒙古人民出版社。第 13 輯 1984 年、内蒙古文史書店）、『李守信自述』（第 20 輯 1985 年、内蒙古文史書店）、『偽蒙古軍史料』（第 38 輯 1990 年、内蒙古文史書店）等、総数 51 輯。

史料⑤ ジャクチト・スチン著（1985）『我所知道的徳王和當時的内モンゴル』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。シリシゴル盟政務院に務めていた札奇斯欽（ジャクチト・スチン）の回想録。

3 陸軍で実施された 1925 年の「宇垣軍縮」のことかと思われる。

4 張海鵬。もと中華民国軍人。漢人。北京政府の奉天派に属し、1931 年の満州事変後に関東軍へ投降して満州国に参加。

5 土肥原・秦徳純協定とは張北での日本と中華民国国民革命軍第 29 軍との衝突をめぐる日中両国間の協定である。1935 年 6 月 27 日に結ばれた。察哈爾省北部における日本の軍事行動を尊重するなどの条項も含まれている。日本側と中華民国側の代表者の名が協定名となった。

6 長志珠絵先生（神戸大学）の御教示によってこの史料の存在を知った。謝意を表したい。

史料⑥ 板垣征四郎刊行会編（1972）『秘録 板垣征四郎』芙蓉書房。この史料には関東軍参謀時代から1945年の東京裁判によって死刑になるまでの板垣征四郎の生涯が描かれており、関東軍内部の同僚による回想や板垣征四郎本人の手記、日記、遺言も収録されている。ただし、この史料も批判的に扱う必要があると言われることが多い。

史料⑦ 小林龍夫・島田俊彦編（1964）『現代史史料7』、島田俊彦・稲葉正夫編（1964）『現代史史料8』、角田順編（1964）『現代史史料10』みすず書房。

史料⑧ 松井忠雄（1966）『内蒙三国志』原書房。関東軍の熱河作戦に参加したドロンと徳化の元特務機関補佐官による回想。

史料⑨ アジア歴史資料センターとしてウェブ上で公開されている史料：日本陸軍第七師団が1934年に作成した記録である『熱河常報』の17号「朝陽県ニ於ケル蒙旗ノ県治ニ服セサル件」、37号「朝陽県下ニ於ケル蒙古保安隊存続ニ関スル満蒙両当局ノ意見ニ就テ」等。防衛省防衛研究所所蔵。

III 研究の枠組み

3.1 募兵工作実施前の状況

3.1.1 煙草谷平太郎の描く当時の国際状況

募兵工作は関東軍の内蒙工作の一環であったため、それに直接関わる日本側の要人が考えていた当時の時代背景にも当然注目すべきであろう。

煙草谷の史料①での記述は、この募兵工作がどのような時代背景のもとで行われたかを紹介している。満州国の建国後、ソ連は東支鉄道を満州国に売却し、満州国における勢力を失った。しかしソ連は外モンゴル領内に軍隊を集結して、日本・満州国と軍事的に対立している状態であった。このようなソ連・外モンゴルと日本・満州国との対立状態は、関東軍が西部内モンゴルの軍事政権のために軍隊を募集して、内モンゴルの軍事力を日満勢力に加えるという募兵工作の重要な要因となったと煙草谷は述べている。

関東軍の対内モンゴル政策としては、以下のようなモンゴル人を募兵して軍事を強化するという要領（方針）が含まれていた。次の史料は島田・稲葉（1964:540）（史料⑦）の『対蒙（西北）施策要領』（昭和十一年一月 関東軍参謀部）と島田・稲葉（1964:551）（史料⑦）『内蒙工作の現状に就いて』（昭和十一年四月二十八日 関東軍参謀部）である。これらの史料によると、関東軍参謀部は西部内モンゴルで軍隊を強化するという政策を募兵工作の直前に計画していたことがわかる。「 」、（ ）、句読点等の記号は史料にもとからあったものであり、〔 〕内のみ引用者が補ったものである。以下同様。

『対蒙（西北）施策要領』（昭和十一〔1936〕年一月 関東軍参謀部）

八、軍事指導の工作は左の諸項に拠る

（イ）当初先づ騎兵四ヶ師の編成を整へ之が練成⁷に努む…

『内蒙工作の現状に就いて』（昭和十一〔1936〕年四月二十八日 関東軍参謀部）…

第四、軍備充実の現状

7 島田・稲葉（1964:540）（史料⑦）。またアジア歴史資料センター C12120032100 として web 上でも閲覧可能。

一、内蒙施策要領に基く蒙古軍二個の充実に関しては三月中旬満洲国軍政部及当軍司令部間に於いて協議の結果四月上旬より充実に着手することになり三月下旬より募兵に着手し六月下旬迄には二ヶ軍約一万保安隊（各盟旗約二千）四個約八千（阿拉善 額濟納及土默特は当分の内旗自体に於いて所要の数を充実に将来盟政革新に際し軍政府の統制下に置く予定）とする筈⁸…

3.1.2 募兵工作に至るまでの煙草谷平太郎の動き

史料②の表紙に書かれている住所から推測すれば、煙草谷は、戦後、高松市の自宅から東京の防衛庁防衛研究所戦史室へ手書きのこの原稿（史料②）を送ったようである。戦史編纂官稲葉正夫⁹は史料②の説明部分で以下のように述べている。

筆者〔煙草谷のこと〕は〔陸士〕29期生であるが、軍縮のとき現役を去り、満洲事変に浪人として渡満、爾来満洲国につくす。特に熱河作戦以来満軍の指導官として作戦および西境の治安工作の第一線で活躍、土肥原・秦徳純協定成立に功績があった。昭和十〔1935〕年八月板垣参謀副長の懇望に依り蒙古入りし、徳王工作にあたる。特に新軍編成、綏遠事件に於ける戦闘指導にあたった殆ど残存唯一の人である。この記録は当時を活寫に妙。貴重な史料である。

関東軍によって「察東¹⁰警備軍」として編成された李守信の部隊が1935年冬から察東地域へ進軍し始めた。察東の6県を占領し、チャハル八旗東部も占領した。徳王は1936年1月1日に張北にて蒙政会の名義でチャハル盟公署の創設を命じた¹¹。土肥原秦徳純協定の締結とチャハル盟公署の創設によって、将来募兵工作の重要なルートとなる承德から徳化までの地域に、募兵を妨害する武装勢力がなくなったのであった。つまり、この地域が完全に蒙疆政権と満洲国の支配下に入ったことによって、募兵工作に有利な条件ができたのである。

3.1.3 募兵工作の辞令受領

煙草谷は自分自身の経歴について史料①で「〔板垣は〕雲王¹²を首領とする徳王一派の組織せる百靈廟の蒙政会を懐柔して我僚下に入れる工作を実施つつ、一方若くして最も勢力のある徳王と、我優秀なる浪人者と手を結ばしめ徳王を擁立して建国の工作従事せしめんとした、浪人者として選ばれたのは煙草谷一人でありました¹³」というように第三者の視点で書いている。ここから、煙草谷の最初の任務が徳王を擁立して、蒙疆政権の樹立に携わることであったとわかる。

煙草谷は現役の軍人ではなかったが、上司として彼に直接命令するのは関東軍参謀副長の板垣征四

8 島田・稲葉（1964:551）（史料⑦）。またアジア歴史資料センター B02030154500 として web 上でも閲覧可能。

9 稲葉正夫（1908年5月1日～1973年10月10日）は、日本の陸軍軍人、戦史研究家であった。1957年から防衛庁防衛研究所の戦史編纂官を務めた。

10 察東とはチャハルの東という意味である。

11 森（1994）、p.117。徳王の回想である。

12 ユンタンワンチュク親王（1871-1938）。ウラーンチャブ盟盟長、ダルハン旗旗長を務めていた。1912年に北京政府によって親王と認められた。

13 春日（2004:84）（史料①）。

郎であった。板垣と面会したことについて煙草谷は詳細に回想している。その会話の中に、最も重要なこととして内蒙工作としての募兵計画が含まれていた。以下の通りである。

〔昭和〕十〔1935〕年八月関東軍司令部に呼び出された私は板垣少将より次の如き指令を受けた…〔〕貴下は今の衰滅した蒙古を昔に復活してもらふ人物として適任であると信ずる、どうかこの仕事を引受けて下さらんか」と問はれたそこで私は過分の面目と感じ、喜んでお享けする旨を答えた…板垣少将曰く、満洲建国以来外国の目が、うるさい、こともあって蒙古工作は極秘裡にやらねばならぬ、貴下は幸、豫備役である、浪人者として徳王を援助して国を興すよう此筋道に沿ふて万事やってもらいたい、大二世沈吉思汗〔チンギス・ハーン〕となつて貴下の思ふままの仕事をしてもらいたい、其方法、手段は貴下に任する旨を強く言はれた（自分は初めて板垣さんに会つて初めて其偉大さを知つた、まだ日本には此程の大將軍が居らるる、君の思ふまゝの蒙古を作れ、皆てを一任する—と云ふ其度胸の程、敬服の外なしであつた、）板垣さんは言葉を續けられて今蒙古兵としては李守信軍が二千いるのみだ（駐屯地は多倫）従つて貴下は出来るだけ多くの兵隊を貴下の手によつて募兵し自ら其長となつて其兵隊を教育し、其軍を基幹として先づ察哈爾を平定し綏遠—寧夏—甘肅と逐次全蒙を包括する内蒙古を建設して頂きたい、尚貴下は豫備役であるので現役者が介入しては仕事がやりにくいと思ふので該地特務機関長（田中久）以外に將校は派遣しない、尚仕事は極秘裡に進めたいので報道陣や憲兵は入蒙させないと付け加えられた」…尚板垣副參謀長の手から私は「関東軍囑托但し無給とする」といふ辞令をもらった。¹⁴

煙草谷が板垣征四郎の辞令を受けた時にすぐ喜んで引け受けたことから推定できるのは、彼が板垣のことを非常に尊敬していて上司としても敬意を抱いていたことである。また、徳王に協力して内モンゴルを復興させるという計画に煙草谷自身も以前から期待していて、それを担うことを一種の名誉であると感じていたと思われる。

この会話に反映されているのは、当時の日本が国際的に批判を受け、特に満州事変によつて満州国を建国した後、国際的に孤立していたという事実である。そこで内蒙工作も秘密裡に行われていた。一方、板垣征四郎の資料には内蒙工作について少ししか言及されていない。「内蒙政權樹立ノ目的ハ外蒙ノ勢力ノ北支進出ヲ防止セントスルニ在リ」¹⁵というように、内モンゴルを復興させてもう一つのモンゴル（外蒙すなわち共産主義勢力）の南下を防止するためであるという目的のみが明記されている。その背後にソ連という強大な仮想敵国の存在があつたからである。一方、募兵の任務を与える時の会話では同じ日本人同士である部下の煙草谷に対してモンゴルを復興させ昔のチンギス・ハーンのようなリーダーになるよう励ましている。日本人でありながらチンギス・ハーン2世となつてこの任務を遂行することを板垣と煙草谷の二人が考えていたというのは不思議であるが、モンゴル人を募兵するのでモンゴルの偉大なる先祖を標榜したのであろう。

1935年9月18日、板垣征四郎、河辺虎四郎（関東軍情報課長）、田中隆吉（參謀長）がウジュムチン旗で徳王と面会し、徳王の新京訪問について打ち合わせを行った。11月、徳王は新京において関東軍司令官南次郎と面会し、漢人を含まない純粹モンゴル人部隊を編成して親衛隊として訓練してほし

14 春日（2004:85）（史料①）。

15 板垣征四郎刊行会編（1972:376）（史料③）。

いという条件を出した。関東軍は徳王のこの希望を受け入れた¹⁶。徳王が日本側と協力した理由はいくつかあり、本稿では紙幅の都合で詳しく言及できないが、関東軍自体が徳王の協力を得るための条件として純粋モンゴル人部隊の編成を徳王と会う以前から計画していたわけである。一方徳王の当面の最大の敵である綏遠省の傅作義¹⁷は圧倒的な軍事力を持っていた。徳王はそれに対抗できるモンゴル人部隊を編成する希望を最初から持っており、関東軍の援助によってその夢が叶うので、日本側と協力することにもなったのである。

3.1.4 煙草谷平太郎と李守信軍との関わり

煙草谷が募兵の命令を最初に受けたのは1935年8月であり、実際に募兵工作を実施したのは1936年4月から8月の間であった。

煙草谷は、募兵工作の直前には李守信の察東警備軍というモンゴル人と漢人の混成部隊の軍事顧問を担当していた。当時の特務機関員であった浅見喜久雄が後方勤務をしていた。李守信とその部隊は関東軍内蒙工作の一環として結果的に蒙疆政権の第一軍へ組み込まれることになるので、結局、煙草谷は最初から内蒙工作に関与していた重要人物であったといえることができるであろう。

3.2 募兵工作

3.2.1 徳王による1934年の募兵

もともと徳王は1934年にも満州国領内での募兵を計画していた。韓風林暗殺事件¹⁸が起きて、徳王は国民党を信頼しなくなり、日本の力を利用しようと考え始めていた。当時は土肥原・秦徳純協定が結ばれる前で、かつ李守信が察哈爾を占領する前であって、募兵工作はこれも秘密裏に行われていた。煙草谷平太郎による1936年の募兵工作に参加することとなる宝貴廷、烏雲飛らも1934年の募兵に参加していた。特にこの2人はモンゴル人との交流や通訳の面で1936年の時にかかなりの程度役割を果たしたと考えられる。モンゴル人による軍事力の強化を以前から計画していた徳王は、漢人部隊が多い李守信部隊にモンゴル人の兵士を集めようとしていた。徳王は1934年の募兵について以下のように回想している。

〔森（1994）による日本語訳〕

私は、宝貴廷を密かに満州国に派遣して兵隊を募集することにした。……一九三四年冬、宝貴廷は、満州国察東警備軍司令官李守信と多倫特務機関長植山宛の私の手紙を持って、ひそかに多倫に赴き、植山と李守信の協力の下で東部の各盟旗で兵隊を募集して馬を購入し、ひそかに兵士の訓練をおこなった。募集した兵士の一部で李守信管轄下に一個師団を設立し、宝貴廷を団長に任命した。のち、烏雲飛（トブゴルロ）・任殿都・雲麟・バト等を派遣して中隊長・小隊長に充てるとともに、しだいに拡充しようと計画した¹⁹。

16 板垣征四郎刊行会編（1972:546）（史料③）。

17 中華民国軍人。政治家、軍閥、綏遠省省長。中華民国時代は北京政府、国民政府の山西派に属していた。

18 徳王側近の韓風林が日本の特務という疑いで、国民党憲兵第三団によって1934年9月5日に逮捕され、殺害された事件。

19 森（1994:97-98）。徳王の回想である。

このように、徳王の周辺でモンゴル人を最初に募兵していたのは徳王本人であった。日本側の植山機関長や李守信に協力させて募兵計画を実施していた。そして、宝貴廷、烏雲飛などのモンゴル人も煙草谷平太郎の募兵工作以前の段階で既に東部内モンゴルでの募兵工作の経験を持っていたのである。ただし、この1934年当時の募兵は小規模な募兵にすぎなかった。

3.2.2 募兵前の熱河省の状況

日本側によって「従来熱河ハ察哈爾綏遠ト共ニ三特別区域ノ一ニシテ蒋介石ノ北伐完成ニ伴ヒ省政ヲ布カレタルカ之カ為漢人ノ進出益々活発トナルニ及ビ蒙古人ノ受ケル壓迫愈々大至レリ²⁰」と報じられているように、1928年の省設置以来、熱河省方面では漢人の進出によって日々モンゴル人が圧迫されるようになっていた。それだけに留まらず、「旗、盟及蒙旗ノ結束ニ就テ……旗ハ一独立国家ヲ意味シ旗ノ長タル王爺ハ旗ノ全権ヲ統ウ盟ハ旗ノ聯合ヲ意味シ一族ノ王爺ニヨリ形成サル……大勢ハ次第ニ蒙旗結束ノ機運ニ向ヒアルモノト云フヲ得ヘシ²¹」と報じられているように、清朝時代からの旧盟旗制度の存続そのものも深い影響を受け始めていた。

このような中華民国による政策上の問題もあって、熱河省方面ではさらに漢人とモンゴル人との大きな軋轢が起きていた。特に寧城県や平泉県でその軋轢が著しく、そのうち平泉県の状態は以下のよう²²に記録されている。

平泉縣ノ大部ハ従来蒙古王領ニ屬セシカ漸次漢人ノ侵蝕ヲ受ケ現在殆ンド其ノ勢力凋落スルニ至レリ然ルニ北隣寧城県ニ於テハ喀喇沁右旗及喀喇沁中旗ヲ據点トシテ終始漢人ニ對抗シ其ノ勢力ノ發展ヲ拒守スヘク兩者ノ確執甚タシキモノアリ……縣内ニ於ケル土默特旗ハ新タニ保安隊ヲ編成シ擅ニ地租ヲ徵集シ其他行政上越權ノ行為多ク依然縣、旗、對立ノ狀況ヲ續ケアリ、之ニ關シ省長ハ蒙旗ニ關スル一切ハ當分熱河事變以前ノ原狀ニ依リテ處理スヘキ方針ノ下ニ夫々旨令ヲ發シ擅ニ權限ヲ擴張シテ紛擾ヲ來タスヲ許ササル旨通告スルト共ニ縣長ニ對シ之カ取締竝ニ宣撫ヲ命令ス²³……（県公署からの布告）擴大セル保安隊及準備中ノモノハ即時解散シテ各々其郷里ニ歸還セシメ各處ニ分駐シテ政治ノ進行ヲ妨害スルヲ許サス……以上ハ省公署ヨリノ指令ニ基キ布告スルモノニシテ公布ノ當日ヨリ一切ノ政務ハ縣公署ノ處理ニ屬スヘク旗公署ノ干涉ヲ許サス²⁴

募兵工作の直前に満州国の配下に入っていた熱河省の蒙旗の状況については、この関東軍第七師団参謀部の史料が極めて重要な参考となる。この史料⑨を見ればわかるように、清朝、中華民国、満州国と政権が交代していく中でも旧盟旗はなお自らの保安隊を作り、徴税さえもしていた。旧盟旗の行政権は満州国熱河省の内政にも影響を与えていた。

土默特旗が保安隊を作って徴税をしていたのに対して、省長らは熱河事変以前の中華民国時代の通りに処理しようとしていた。中華民国による省の設置以来存在していた旗と県との対立は解決されず、

20 史料⑨、p.0062。

21 史料⑨、p.0431。

22 史料⑨、p.0061。

23 史料⑨、p.0282。

24 史料⑨、p.0414。

旗の行為を越権行為だと省長らが認識していたことがわかる。

史料⑨『熱師常報』にはハラチン旗、トゥメト旗等の例があげられているが、当時の熱河省には14の旗が存在し、これらの蒙旗に関しても概ね「立法司法ノ見ル可キモノナク依然トシテ清朝舊旗制ヲ採用シ以テ畸形的行政ヲ保守シアルニ過キス²⁵」と記述されている。一般のモンゴル人についても「一般蒙古民ハ之等旗長並王公ニ對シテハ絶対服従ヲ守リ毫モ反抗スルコトナシ²⁶」と記述されている。熱河省14旗の蒙旗の状況として参考になるであろう。

蒙旗の保安隊は省公署の支持を得ることができず、強い反対を受けていた。旧盟旗のもとで軍事力を集めることが難しくなっていたのである。募兵工作直前の熱河省の蒙旗では中華民国や満州国の配下に入ってから清朝以来の盟旗制度によって行政を行っていたため、県と旗が対立し、役所が重複する二重行政となっていた。そして旗の保安隊は省の承認を得ることが難しかったため、各旗のモンゴル人武装勢力の行き場がない状態であった。これも熱河省から多くのモンゴル人が募兵に応募したことの原因の一つであったかもしれない。

3.2.3 募兵の困難さと募兵方法

煙草谷は1936年の時の募兵の方法について、以下のように書き記している。

五、募兵工作（昭和十一〔1936〕年四月より八月までの間）

蒙古民族は元来牧畜種屬であつて、兵隊になることは死よりも嫌いな種族である、従つて此等を徵募することは難事中之難事である、従つて最も巧な宣撫工作と方法を考えなければならぬ、で私は先づ王族、豪族を口解き次で人民を理解せしめて建国の夢を喜ばせなければならぬと考え優良なる人物を撰んで之を各地に派遣し自らも先頭に立つて人民を口解くことにした²⁷、…
…幸い²⁸蒙古人の間には、昔から軍人になることを恐れる習慣があり、募兵は至極困難であつた。すると承德特務機関の松井源之助中佐は僕をひやかし「煙草谷、一体幾人集める気か」と問われる。「まず2000人」と答えると、「僕でさえ、多額の金を使って、3年かかつて、やっと、ただ100人集めただけだ。君がもし1年間で100人募兵したら、奉天で一杯おごつてやる²⁹」という。…
もう一人の機関長であつた太木機関長は「300名以上は絶対集まらない」と予言して³⁰いた。

以上のような煙草谷周辺の日本人たちの所感は、募兵工作に対してネガティブなものであつた。中華民国時代には東部内モンゴルも軍閥の内戦に巻き込まれ、そもそもモンゴル人の政權自体が存在しなかつた。すなわち、当時の募兵は常に他民族のために戦う兵士になることを意味したために、軍人になることを嫌う傾向があつたのではないだろうか。また、清代に平和が長く続いたことも関係するかも知れない。いずれにしても松井源之助中佐は、資金があつたにもかかわらず3年間でモンゴル人兵士を100人しか集められなかつたというのである。

25 史料⑨、p.0089。

26 史料⑨、p.0089。

27 春日（2004:86）（史料①）。

28 煙草谷の書き誤りかもしれない。

29 春日（2004:3-4）（史料①後半部）。

30 春日（2004:87）（史料①）。

その一方で、当時の東部内モンゴルにおいては、モンゴル人兵士を有する勢力といえば、満州国興安省のモンゴル人軍隊や関東軍によって改編された李守信の漢人部隊に混じる少数のモンゴル人部隊などが存在していた。東部内モンゴルの方が西部内モンゴルよりも、もともとモンゴル人兵士の数が多かったことは特に注目すべきであろう。これには入植漢人との民族対立・民族紛争から来るナショナリズムの問題が関係しているかもしれない。募兵対象地域が東部内モンゴルに設定される傾向が強かったことも、この問題と直接かかわっているはずである。

しかし、回想によると、当時煙草屋らがモンゴル人を募兵することは東部内モンゴルでも通常の方法では困難であったらしい。煙草谷は資金もないため、他に良い方法を考え出す必要があった。煙草谷の思い付いた独特の方法については、回想録に以下のように記述されている。

対蒙人共の口解き方の一例

私は一部落の民衆集合の前に立って叫んだ、「〔〕諸君はまさか沈吉思汗〔チンギス・ハーン〕を忘れやしまいね」又「〔〕其当時の蒙古人即ち諸君の先祖がいかにして国を護り、いかにして世界に誇るべき武力を輝やかしたか、の氣憶はあるだろうね」と聞いてみた。すると民衆はどよめき、「〔〕おー、沈吉思汗は我々の先祖であり大偉人であった」と、「〔〕うん然るに今の諸君はどうであるか、切角諸君の大先祖が造って呉れた蒙古は今や漢人種のために其土地は奪われ、家畜は取られ、住む家さえも持たぬ人々の多きことを、今や最も良き例として満州国が出来たではないか、満州国は満州人の手によって造られたのだ、満州国にならって蒙古人も今を機会に蒙古を昔の強い蒙古にしようではないか、それには兵隊が必要だ、私は関東軍の指令によって諸君の後援に来たのだ、蒙古は蒙古人の手によって復興すべきである」と叫んだ、大衆の間に「沈吉思汗の再現だ万歳」と叫ぶものあり

そこで私は語調を更めて、国を作る基礎は兵士だ、十八歳以上四十歳以下の男子は皆兵隊になって呉れぬかと誘った、其時四十歳ぐらいの男が出て、此子供二人とも一しょう³¹に兵隊にして呉れるならば三人そろって兵隊になると申出た。（二人の子供は十五才と十三才とであった）

私は其申出を見て嬉しくて泣けた。民衆も興奮してはやしたてた

彼等三人を其場で兵士の中に加えた。山を越え、谷を渡り、自動車の後押しをくりかえしながら晝夜兼更、食糧にもあぶれながら末梢³²の地まで駆け廻った。

板垣が煙草谷を呼び出した時に「貴下は今の衰滅した蒙古を昔に復活してもらふ人物として適任である」と説得したように、煙草谷はモンゴル人の民衆に対して明らかにモンゴル民族のナショナリズムを煽ることを重視したのである。上記の史料に見えるように、主に以下のような三つのステップで軍隊に誘ったことがわかる。

まずチンギス・ハーンという偉大な先祖をほめたたえ、そしてその時代のモンゴル帝国がいかに偉大であったかという点をアピールする。次に、内モンゴル人の現状としては漢人によって土地を奪われ、自らの国を持たない苦境に墜ちていることを語る。そして最終的に、関東軍の援助によって満州人は満州国を建国して成功したという事例を挙げ、これに習ってモンゴル人も軍隊に入って自分たちの国を成立させるべきだということを主張した。煙草屋のこの方法はすぐに役立ち、その場で兵隊に

31 「一しょ」の書き誤りと思われる。

32 春日（2004:86）（史料①）。

応募するモンゴル人が現れていたことがわかる。もちろん、満州人が満州国を建国して成功したなどというのは、日本側からみた詭弁に近い単なる言い訳であるが、少なくとも当時の内モンゴルの人々がおかれていた状況に関しては十分な説得力を有していたと思われる。

3.2.4 募兵の経過

3.2.4.1 各地からの報告と徳王等モンゴル人の関与

最初の頃の募兵班と各地からの報告について、煙草谷は以下のように回想している

六、募兵の経過

隊長の寶貴廷中校を少将に昇進せしめ、満州国日系軍官である佐藤、岡、両中尉と服部教官と私の蒙古人養子である二少年（玉藻少年十六才、屋島少年十五才）及衛隊十数名を以て募兵司令部を組織し、熱河特務機関に本部を置き、北は南興安省から南は熱河のはてまで募兵班を派遣した、五月中は募兵に関する報なし六月初旬も空しく過ぎた私は熱河承德特務機関長太木中佐の予言（蒙軍の募兵は不可熊³³也）想い浮かべて、たまらなく悲痛を感じたが、何糞もう暫くの辛棒だ。と自己の心に鞭打ちながら、應募兵の報を俟った、〔1936年〕六月十三日夕刻に至り初めて承徳の東南方に在る青龍縣から十六名の兵員を獲得したことを知らせて来た恰も雨乞中の最初の一滴を得たことに雀躍した。其夜軍神を祭る関帝廟に参拝して御礼を申し上げた其夜は憂楽、心を往来して眠れなかった翌早朝起きて、承徳の川に沿って散歩してみた、朝食もそこそこにすませて、一ぷくする、本日は天氣晴朗の朝だ、何か良い象がなかろうかと又一ぷくしている折も折である、募兵班からの連絡員が私を訪れた。阜新県の依紹先³⁴からの報告である、保証人付きの三三九名募兵したとある。私は三三九名とは三三九度の盃に通ずる縁起の良い数だ、遅まきながら太木機関長の言った、三百名以上は絶対集まらぬといふ予言³⁵を覆した、僕の勝利だ

この回想で記述されているように、募兵の司令部に日本側からは煙草谷、佐藤中尉、岡中尉、服部教官などの軍人が参加していた。煙草谷は募兵司令部の総司令となる。また後に第七師師長となる依紹先が阜新県あたりの募兵を担当したことがわかる。募兵に協力したモンゴル人について徳王は以下のように回想している。

〔森（1994）による日本語訳〕

蒙古軍総司令部の設立後、兵士の募集と軍隊の拡大がその主な仕事となり、寶貴廷と烏雲飛をジョソト・ジョーウダ両盟へ派遣して兵士の募集をおこなったほか、包悦卿をジウム盟に派遣して兵士を募集した³⁶。

徳王のこの回想によると、募兵に関わったモンゴル側の人物として寶貴廷、烏雲飛、包悦卿が入っていた。徳王は煙草谷の募兵工作に協力させるためにこの3人を派遣したのである。そしてこの3人

33 「不可能」を煙草谷が書き誤ったものと思われる。

34 後に第7師長となる人物。詳しくは後述する。

35 春日（2004:87）（史料①）。

36 森（1994:127）。徳王の回想である。

も募兵工作に大きな役割を果たした。史料①に掲載された募兵司令部の写真で宝貴廷が確認できることからそれがわかる。すなわち、募兵工作は日本側と徳王側の協力によって行われていたのである。

煙草谷の回想で示された募兵の範囲である「南興安省から熱河省のはてまでの地域」とは、すなわち、興安南省、興安西省、熱河省、錦州省辺りで、徳王の回想にも出てくるように、旧モンゴル盟旗でいうジリム盟の西部、ジョーウダ盟、ジョスト盟を含めた地域である。承徳の青龍県とは熱河省東南部（現在は遼寧省の満州族自治県。少数のモンゴル人も居住している）で、阜新は旧ジョスト盟トゥメト左旗の地域である。

3.2.4.2 活仏の還俗と師長任命

煙草谷は、チベット仏教の活仏を利用して募兵工作を行なったことについても、以下のように記録している。

七、活仏の還俗と師長任命

募兵の条件としては四十名集めた者は排長（小隊長）百名は連長（中隊長）三百名は團長（連隊長）に千名集むれば師長（師團長）に任命することに定めておいた、熱河省の土默特左旗で活佛だった阜新の王（旗長とも稱す）沁王爺の兄で年は四十三歳だった、此活佛に会った時私は次の如く説得した即ち、「〔〕活佛として佛に仕え人を救ふのは法の道であり、長い間しいたげられた今の蒙古人民を昔の形に復活せしめて安樂の道と與えて、やるのも法の道である。ただ前者は靜であり後者は動である、³⁷秋によって此兩者を巧みに使い分けるのが聖者であるのでなかろうか、幸、貴下には今こそ後者を撰ぶ機が到来したと私は考える」と説教すれば、流石は伶俐な活佛は膝を叩いて あゝ、 そうだ私は佛門を去り兵を募って從軍することを契った。³⁸

ここでは煙草谷が阜新のトゥメト左旗旗長（煙草谷の誤り。実は右翼旗）の兄である活仏（後に第六師の師長になる宝恩普）を説得したことを記している。史料①の回想にその写真もある。宝恩普は自ら從軍することを決心しただけでなく、自らも募兵に協力したというのである。すなわち第六師の兵士を募って、第六師師長となったのである。旗長の兄であり、かつ活仏だったので、ある程度以上の人望があったはずである。これも煙草谷の募兵工作のもう一つの手段であったことがわかる。説得する際にはやはり民族のナショナリズムに訴えている。

前述した煙草谷の発言にある「蒙古は今や漢人種のために其土地は奪われ、家畜は取られ、住む家さえも持たぬ」という状態は、清末から多くの漢人農民が内モンゴル東部・南部の「解放蒙地」へ入植し、モンゴル人の生活を脅かしつつある当時の現実そのものであった。³⁹

3.2.5 部隊の集結と輸送問題

3.2.5.1 部隊の集結

煙草谷は、新たに募兵された部隊をまず平泉（現在の河北省承徳市平泉県）に一時的に集結させて、そこから蒙古軍政府の首都徳化へと移動させることを考えた。5000人に達してからは関東軍が奉天に

37 煙草谷の何らかの書き誤りかもしれない。

38 春日（2004:87-88）（史料①）。

39 江夏（2005:60）参照。

設置した被服廠から軍服を調達して新兵に着せた。募兵工作は秘密裏に行われていたが、いきなり大勢の兵隊が漢人、モンゴル人、満洲人の雑居地である承德市に溢れることにならざるを得ない。日本の行動は国際的に批判を受けていたが、史料①の煙草谷の回想からは承德の市民には歓迎されていたことがわかる。

部隊に詳しい李守信の回想によると、集まった兵士たちは蒙古軍の第四師、第五師、第六師（実際には第四～九師）に編成されたというが、彼らの中には元来、李守信の以前の部下であった人々や、李守信を頼って身を寄せてきた人々が多かった。その大部分がジョスト盟トゥメト左右両旗出身のモンゴル人であった。⁴⁰ 蒙古軍政府が成立した際には李守信の部隊である察東警備軍を蒙古軍の第一師、第二師、第三師として編成した。この部隊のほとんどが漢人兵士であったため「漢師」とも呼ばれていた。これに続いてモンゴル人ばかりの第四～九師が編成されたのである。

李守信は募兵された新兵について以下のように回想している。

〔引用者による日本語訳〕

彼らの大部分はトゥメト左右両旗のモンゴル「小隊」であり……また「毅軍」⁴¹の少数の旧部もおり、……彼らは私が張北で「察東警備軍」司令官となって「蒙古軍」を組織したという噂を聞き、私についていけば道が開けると思っていた。だから宝貴廷は二ヶ月も経たないうちに六千人もの人を連れてきたのである。

3.2.5.2 輸送問題

当時の煙草谷にとってその次に重要なことは、集まった新兵をいかにして承德から蒙古軍政府の首都徳化まで運ぶかという問題であった。そのルートは募集地平泉から集結地承德へ、そして徳化へ（地図1参照）という順番になる。平泉—承德の間が87km、承德から徳化の間はなんと420kmもの距離があった。徒歩だと1ヶ月もかかる長い行軍になるので、大量の物質補給が必要となる。関東軍参謀部の田中隆吉が日本の管理する満鉄などの機関で若干の資金を得たようであるが、大部分の資金は煙草谷自身が満州国軍第五軍管区司令官の張海鵬将軍との個人的関係を使って解決した。後述する煙草谷の回想にあるように、煙草谷と張海鵬は熱河作戦のとき一緒に戦っていた仲間同士であった。熱河省長でもあった張海鵬は熱河省の各県において県の商会から部隊に物資を無償給付するよう布告したのである。これによって、兵隊の徳化までの行軍途中での補給問題が解決した。募兵した兵士の数について煙草谷は、承德の町に一万人が溢れていると記述している。また、全ての部隊を17梯団に分けて1梯団あたり600人を徳化へ出発させたということから推定すると、募兵工作全体で10200人程度は集めることができたと考えられる。行軍途中でアヘン常習者150名が死亡したという数を除いても10000人ぐらいは集まった。

3.3 募兵の成果

3.3.1 新たな蒙古軍の編成

募兵工作で集まった全ての兵士10000人を六個師団に編成し、蒙古軍は一気に合計九個師団にまで

40 『李守信自述』（史料④）:238。

41 毅軍とは1912年、北洋政府の臨時大総統袁世凱が熱河の地方軍隊をまとめて作った軍隊のことである。

拡大することができた。これによって蒙古軍政府はその最大の敵綏遠省の傅作義軍に何とか対抗できるような軍事力を持つようになったと思われる。

募兵された新兵は蒙古軍の第二軍（第四師～第九師）として編成された、後に徳王自らが第二軍の軍長になるが、煙草谷平太郎が集まったばかりの軍隊の最初の軍長となった。第一軍に漢人部隊が多数いたのに対して、第二軍はほとんどモンゴル人ばかりであった。下記の一覧表は煙草谷の作成した名簿である。

第二軍の編成表

第二軍長 中將 煙草谷平太郎、第四師長少將 寶貴廷、第五師長少將 包悅郷、第六師長全寶恩普（四活佛）、第七師長全 依紹先、第八師長全 梨副師長、第九師長全 穆總監、各師團司令部には教官（中校）を配屬指導せしむ⁴²

上記の師長の内、宝貴廷（モンゴル名ウネンバヤル）はジョスト盟トゥメト右旗出身の軍人で、蒙政会保安隊隊長であった。李守信の遠い親戚である。包悦郷（モンゴル名サインバヤル）はジリム盟ホルチン右翼前旗出身。蒙政会委員で、後に蒙疆銀行総裁となる、1937年ドロンで病死した。宝恩普はトゥメト左旗旗長の兄で、前述したもと活仏。依紹先は別名依恒額（イヘンゲー）。トゥメト左旗出身で、李守信と義兄弟であった。日本の敗戦後李守信の人民自衛隊で支隊長となる。梨副師長のモンゴル名は扎青扎布（ジャーチンジャブ）。トゥメト左旗の扎蘭章京の息子で、李守信の義兄弟であった。八師のみ副師長名が書かれている理由は不明。穆（ムグデンボー）總監がなぜ「總監」と呼ばれていたのかについては、煙草谷はよく知らなかったようである。

以上の師長に関しては、煙草谷が名前を取り間違えた可能性もある。穆克登宝師長の息子（哈日怒徳苏徳那木达尔扎）の回想によると第四師から第九師の師長はそれぞれ、第四師師長宝貴廷、第五師師長依恒額（依紹光）、第六師師長宝彦図、第七師師長穆克登宝、第八師師長包悦卿、第九師師長包海明であったと言う⁴³。穆克登宝（ムグデンボー）はもともとチャハル鑲黄旗総管であったため、チャハル12旗の地理的範囲内で第七師のモンゴル人を徴兵したとも述べている⁴⁴。「總監」ではなく、もと総管であったためにそう呼ばれていたようである。

第六師師長寶恩普は、宝彦図が正しいという説もあるが、さらに宝彦烏力吉という説もある。ジョスト盟トゥメト右旗の棍布札布（棍王）の四男で、幼少年から活佛と称されていたため「四佛爺」とも呼ばれていたらしい⁴⁵。

募兵が行われる前は、1936年5月12日に成立した蒙古軍政府の蒙古軍の主な構成員としては、徳王の率いる蒙政会保安隊と李守信の率いる察東警備軍のみであった。そのうち、李守信の察東警備軍は三個師団の兵力を持ちながらも、漢人部隊がほとんどであって、後に漢師とも呼ばれることになる。この李守信の部隊が蒙古軍の第一軍として編成された。蒙政会の保安隊は徳王自身によって統率され

42 春日（2004:91）（史料①）。

43 『内蒙古文史史料』51輯（史料④）、p.87。

44 『内蒙古文史史料』51輯（史料④）、p.75-107。

45 史料⑤、p.17。ジャクチド・スチンのこの回想（史料⑤）では宝彦烏力吉と記述されている。しかし、煙草谷の回想では寶恩普と記述され、史料④の穆克登宝師長の息子の回想では宝彦図と記述されている。

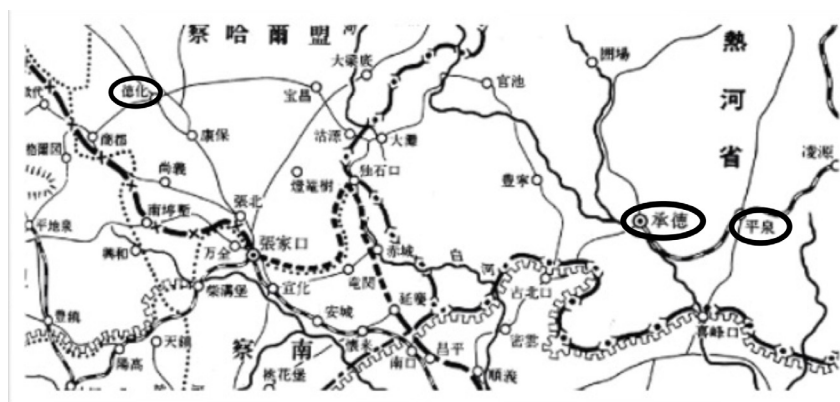
る武装組織である「烏滂守備隊」である。徳王は滂江から外モンゴル国境までの交通の安全をはかるためにこの部隊を擁していた。守備隊の兵士たちはほぼ全員スニト右旗をはじめとするシリングル盟出身のモンゴル人で、徳王を支える武力となった。ただし部隊の数は数百人ほどであった。⁴⁶すなわち、蒙古軍政府が成立した時には李守信の部隊以外にほとんど兵力を持たなかったに等しい。しかも李の部隊は漢人が多数いて、蒙古軍政府という概念から大きく乖離していた。募兵工作以前の蒙古軍の兵力は以上のようなものであって、政権を維持するためにもさらなる兵力が必要であった。募兵工作によって集まった兵士を蒙古軍の主力部隊第二軍の第四師～第九師に編成することで蒙古軍の兵力が一気に倍増し、政権を維持するための軍隊が初めて形成されたのである。

3.3.2 蒙古軍の閲兵式

募兵完成の象徴として1936年8月に壮大な閲兵式が行われた。煙草谷の以下の回想にあるように、蒙古軍政府の首席徳王と関東軍の板垣征四郎が第二軍の新兵を閲兵した。

九、徳化原頭板垣副参謀長の閲兵式

劉嘯たる喇叭の音は平地に連る徳化大草原を逢っては遠く地平線上に棚曳く薄雲の中に溶け込んで行く、私の指揮する一万の軍勢は既に整列を終り国旗は林の如く草原に翻っている、部隊は閲兵検閲官、坂垣少将の到着を待つのみとなっていた、暫くすると合圖の狼火は擧げられた、検閲官を乗せた自動車は閲兵場に到着し、閲兵官に対する敬禮三十六挺の喇叭、「海ゆかば」三回吹奏の間は実に壯嚴といふか、寂として、身のあることを忘れた感に打たれた。「三十六挺の喇叭は私が奉天から買って来た、日本軍用喇叭で募兵間承德駐屯中の私の同期の石川栄次郎中隊長に願って教育してもらったものである。其他毎日数十名の蒙兵の訓練をお願いして優秀な兵は上等兵の階級までもいただいた」閲兵官は編列を検閲する、部隊は分列隊形に移行する、分列行進開始一踏歩の地響は眠れる蒙古をやり起すが如く、一万の軍勢で、蹴りひしがれた生草は鼻つく程の香を発散する其香りは、草原をかすめて通る柔い風に溶け込んで行く味はいは現地の住民のみが満喫し得る清浄さでもあろう、草で生き、草と埋もれて行く蒙古人にとって草は生命であり神でもあろう、此初めて産れた軍勢こそが七百年この方眠って来た蒙古を復活せしむる原動力であり、蒙古救済の軍神でもある斯くして建國の第一歩は茲に印されたのである⁴⁸



地図1 ○は平泉—承德—徳化を示す

46 森（1994:54）。徳王の自伝に基づく。

47 「縫って」の書き誤りかもしれない。

48 春日（2004: 89-90）（史料①）。

新編蒙古軍の閲兵、編成が終了した後、坂垣征四郎、徳王、李守信、田中隆吉参謀、田中久機関長、煙草谷平太郎の計6人が徳化の徳王王府に集まって会議をした時、坂垣征四郎は以下のように煙草谷の募兵工作の成果を高く評価したという。

坂垣少将は立上ると忝々しくと云ってもよい態度で僕の手を握られた、坂垣さんの掌は熱く而も痙攣を感じさせられた。私は少将の顔を仰いだ。彼は眼に一ばい涙さえ浮べておらるるではないか、僕は緊張した手を固く握ったま、彼は「どうも有難煙草谷君、どくしき⁴⁹金費もやらず手傳いも出来なかったのに、短日時の間に斯くも大軍を作って頂いたことは坂垣は終世忘れん、関東軍司令官に代って深く感謝する、誠に御苦労さまでした。今後は貴下の思ふまゝに兵を訓練して大蒙古を作って下さい「私は貴下を沈吉思汗二世と仰ぎ募兵の神様として尊敬します」と私を賛えて下さった。語る人も聞かされる私も只感激無量といふ光景だった⁵⁰

徳王も、蒙古軍政府にモンゴル人部隊ができた事を非常に喜んでいて、そして特に募兵工作に貢献した煙草谷に感激していた。煙草谷の回想によると、徳王は1936年9月13日の建国宣言の時にも以下のようにまず煙草谷及び彼の募兵工作の成果に対して感謝の意を表した。

徳王の建国宣言

「本日茲に沈吉思汗紀元七百三十一年⁵¹を迎え、新に内蒙古の建国を宣言する（爾余は除く）此日出度い日を迎え得たことは関東軍の援助の賜であり又直接之に參與され御奮闘下さった煙草谷先生始め日系教官各位に對して深く感謝するものであり且つ此事は蒙古人民として永久に忘れてはならぬものである⁵²」

徳王の回想録にも、募兵の成果に対して非常に喜んだという閲兵式の時のことが書かれている。

〔森（1994）による日本語訳〕

部隊の閲兵後、私は兵士を鼓舞するため、兵士一人当たり銀貨一元を与えた。またあらかじめ兵隊に多数の黄羊を捕獲させておき、その場で食事をしてみなをねぎらった。閲兵式に出席してのち……今や日本の力を借りて、既に二個軍、一万余騎兵を擁しており、それを拡充していけば、ジンギスカンの偉業の回復とまではいかななくても、「蒙古民族を復興」させ、国際的に強大な民族になって、私自身も「民族英雄」になれると妄想した。このように空想すると、本当にいい気になって、喜色が顔に表われ、幾分一人よがりになっていた。⁵³

49 「ろくしき」の書き誤りかもしれない。

50 春日（2004:90）（史料①）。

51 沈（成）吉思汗紀元とはチンギス・ハーンの即位した1206年を元年とする紀元である。モンゴル人のナショナリズムに訴えかけるべく蒙疆政権下で使用された。沈吉思汗紀元七三一年は、1936年のことである。

52 春日（2004:90）（史料①）。

53 森（1994:140）。徳王の回想である。

徳王のこの回想は、亡命先であったモンゴル人民共和国から中華人民共和国内へもどされた後に書いた「反省文」に近い回想なので、その状況を加味して理解する必要があるが、宿願の第一歩を踏み出したという大きな喜びは十分に伝わってくるであろう。煙草谷自身も建国の祝辞で以下のように語っている。

煙草谷の祝辞

我等は諸君の同志として本日までやって参った、此建国の第一聲を深く心に刻み我々は全民衆の協力によって平和な蒙古を作らねばならぬと思ふ百年の大木一日にして長ぜず、今正に芽を萌いたばかりの所である、此を蒙古国民諸君は熱情を以て育てあげることが諸君の任務であると思ふ私は命のある限り諸君を援助申す覺悟です⁵⁴

3.3.3 煙草谷にとっての募兵工作

煙草谷平太郎の主な経歴をあげると、大正3（1914）年に士官候補生として習志野の陸軍騎兵学校に入り、大正6（1917）年に陸軍士官学校を第29期生として卒業した。大正7（1918）年7月から大正8（1919）年9月の間にシベリア出兵に従軍した⁵⁵。1933年に関東軍の熱河作戦に参加し、1936年に募兵工作を行った。煙草谷は回想録では自分の行動を擁護しているかもしれないし、募兵工作に関する人物や師長などにも取り違えがある。また徳王の回想に出てくるモンゴル人参加者の役割も強調していない。煙草谷の回想通りに理解すると、募兵工作が彼一人の成果であったかのようにになってしまう恐れがある。しかしそれでも、募兵工作の詳細な資料を提供したただ一人の人物であったことは間違いない。煙草谷の功績は、日本側の参加者、あるいは関東軍の募兵計画の実施者としての功績であろう。熱河省長をうまく利用して行軍を成功させた点でも彼個人の能力を評価すべきである。

次に、煙草谷自身にとって募兵工作がどれほどの意義を有したのかという問題も研究の余地がある。煙草谷平太郎は熱河作戦以来、継続して内蒙工作に従事しており、モンゴル人と付き合ううちにモンゴル人に対して特別に強い親近感を抱くようになっていたようである。それは少し前の所で回想を引用したように、2人のモンゴル人少年をもらい受けて養子として育てていたことからわかる。この2人の子供を屋島、玉藻と名づけて、募兵工作に参加させていたのである⁵⁶。ちなみに「屋島」とは高松市の東部にある有名な観光地の名であり、「玉藻」とは高松城一帯を指す地名である。いずれも煙草谷が故郷にちなんで名付けたものと思われる。

3.3.4 募兵工作後の煙草谷平太郎

募兵工作が終わってから、煙草谷平太郎は関東軍に休暇届を出して一時帰国することになる。その日時は書かれていないが、以下のように回想している。

おどろいた。僕は蒙古をさるつもりはなかった。ただ爾後の蒙古工作について、司令部と意見に食いちがいがあり、田中久機関長は満洲国の軍政部に転勤、後任に田中隆吉参謀が座ったからである。⁵⁷

54 春日（2004:90）（史料①）。

55 史料③「ソ連抑留中の懐古」の部分から引用。

56 史料② 第二巻、p.129。

57 春日（2004:10）（史料①後半）。

ただし、妻と白湯温泉に滞在していた時に司令部から電報があつて、彼は再び内モンゴルへ戻ることになる。最高軍事顧問である田中隆吉との意見の食い違いがあつても、再び内モンゴルへ戻ることにした理由としては、煙草谷の自ら集めたモンゴル人兵士や師長たちが、以下の回想にあるように、煙草谷の帰日を非常に心配していたからである。

ところが、蒙古人の師長らが、心配し、僕はこのまま離蒙するのではないかと、36通も司令部に電話をうったらしい。⁵⁸そして僕のところにも師長から3通届いたので、この「三顧の礼」をないがしろにしては、仁者でなくなると、直に、帰蒙を決意し、張北に飛び帰り、田中隆吉機関長に挨拶した。⁵⁹…

僕が帰って姿をあらわすと、第二軍の蒙古兵の士気は大いにあがり、「あれ、うちのモモ（お母さん）が帰った。もう大丈夫だ」とよろこんでくれた。僕を軍長と呼ばず、「ぼくらの軍を生んだ母ちゃん」と。⁶⁰…

母のことを東部内モンゴルの方言で「モモ」と呼ぶ。第二軍にとって煙草谷平太郎は募兵から編成まで参与した人物であつて、第二軍を作った「モモ」のような存在であつた。言い換えれば、煙草屋は第二軍のモンゴル兵の指揮官というだけではなく、非常に親しい関係であつたことがここから実証できる。しかし結局以下のように、煙草谷はその後再び日本へ帰国することになる。辞表を提出して、彼自身の募兵した「蒙古軍」を蒙疆に残したまま帰国することになった。彼の言うように田中隆吉と見解が合わなかったためか、それとも現役軍人ではなかったために辞表を出したのか、そのあたりの原因は不明で、検証が難しい。しかし、彼の回想通りに、モンゴル人部隊と親しい関係となり、モンゴル人部隊に対して日本側の指導理念とは違う見方を持っていることも理解できる。彼の後任としては徳王が自ら第二軍の軍長になる。顧問にもなれなかつた煙草谷平太郎は、おそらく当時の関東軍の内蒙工作と意見の食い違いがあつたのであろう。

僕の舞台は終わった。花の舞台生活ではなかつたが「勸進帳」義経と弁慶にあたる2人2役をシルクロードの入り口で、充分発揮したつもりである。もはや「蒙古」の仕事は玄人にお委せて去るべきである。昭和十二〔1937〕年七月 関東軍に辞表を提出して、⁶¹帰国した。

煙草谷平太郎は地元日本の高松市へ戻つた後も、1939年の徳王と李守信の訪日の際に岡山駅で彼らを出迎えたことを、以下のように自ら回想している。

昭和十四〔1939〕年秋日本政府の招請により徳王並に李守信将軍も共に訪日の日を迎へた、我家族は岡山駅頭に彼等の通過を迎へ、娘と姪に花束を贈らせ遠来の親しき客に対し労をねぎらつた⁶²

58 「電報」の書き誤りかも知れない。

59 春日（2004:10）（史料①後半）。

60 春日（2004:11）（史料①後半）。

61 春日（2004:21-22）（史料①後半）。

62 史料② 第二巻、p.64。

その後、煙草谷は1939年に北京へもどって商売をし、1942年からシンガポールで漁業への従事を計画していた。さらにその後、詳しい事情は不明ながら、やはり結局満州方面へもどって終戦時にソ連軍の捕虜になったようである。そして昭和20(1945年)年8月から昭和31(1956年)年10月という11年間もの長きにわたってシベリアに抑留され、ウラル西北方の北極圏に近いインターという炭鉱などにおいてドイツ人捕虜も含む八千人と共に強制労働に服した。日本へ帰国できたのは、1956年のことであった。⁶³

IV おわりに

内モンゴルの蒙古軍政府にモンゴル人自身の軍隊を作るという理念は、板垣征四郎を代表とする関東軍参謀部と大きな関連を持つ。関東軍は、1931年9月23日から、東部内モンゴル独立運動のガンジュルジャブの軍に武器、弾薬を供与していた。⁶⁴当時の板垣征四郎ら関東軍首脳が内モンゴルの独立運動に便乗し、それを支援・利用しようとしていたことは明かである。本稿で検討した蒙古軍政府のための募兵工作も、その始まりから終わりまで、板垣征四郎等関東軍が背後で関与していた。具体的に言うと、坂垣は国際世論による批判の中で秘密裡に煙草谷を任命して募兵工作を実施し、軍事費への配慮から最後の蒙古軍成立の証となる閲兵式に至るまで自ら関与した。坂垣自身は蒙疆政権のその後の歴史とは直接の関係を持たなくなるが、彼が最も重要な軍隊の編成自体に直接関わっていたということは、本研究の新たな発見である。もし、板垣征四郎らの蒙古軍募兵計画がなければ、蒙疆政権の樹立もその後の発展もなかったかもしれない。

募兵工作の実施者として最も代表的な日本側の人物が煙草谷平太郎であった。募兵工作に自ら携わり、現地のモンゴル人と交流もしながら、軍隊へ入隊することを勧めた。その回想録には、煙草谷自身にとっての募兵工作が、モンゴル人の国を建設し、昔のモンゴル民族のレベルにまで復活させようとする彼なりの使命のようなものであったかのように書かれている。煙草谷の回想だけを見ると全てが彼一人の業績であったかのように誤解してしまう恐れもあるが、板垣からの指令を受けて募兵工作の中心人物として、最も重要な役割を果たしたのは間違いない。

しかしその一方で、徳王自身も軍事訓練や小規模な募兵工作など、モンゴル人自身の軍備強化を1934年の蒙政会の時期から既に考えていた。徳王の回想では少ししか言及されていないものの、募兵工作そのものも徳王自身が主導して行い、部下を派遣したというように書かれている。したがって、東部内モンゴルの出身の宝貴廷、烏雲飛ら徳王配下のモンゴル人は既に1934年の時点から満州国領内での募兵工作の経験を持っていて、1936年の募兵工作でも工作を順調に進めるのに欠かせない役割を果たしたものと考えられる。

この募兵工作は、当時の歴史的背景の下で考察する必要がある。誰か一人によってなしとげられた偉業というわけではなく、更に単一民族集団の国家樹立のためだけに寄り集まったということでもない。工作の計画から実施、そして結果という流れを分析してみると、募兵を主張する徳王、具体的に実施計画を作った関東軍参謀部、募兵の実施担当者煙草谷平太郎、募兵の参与者である徳王側のモンゴル人宝貴廷、烏雲飛、包悦卿等が募兵工作に貢献したほかに、李守信の影響力や熱河省長張海鵬の協力も間接的に貢献したのであった。また、民族自決を求める徳王が関東軍に協力することになった

63 史料③「内蒙古の巻」から引用。

64 小林・島田編(1964:192)(史料⑤)。

理由の一つがこの募兵工作そのものであったという結論は、本稿での検討から確認できたのではないだろうか。及川（2019）の指摘するモンゴルの民族自決運動を利用するという日本側の意図の実践もここで実証できたものと思う。

今後はこの募兵工作によって集まった兵士達についてより詳しく研究し、蒙古軍全体の状況を明らかにしていきたい。また、その後の蒙疆政権下で行われたさらなる募兵工作をも今後の研究課題としたい。煙草谷平太郎の個人史についても研究を続けたい。

参照文献

日本語研究文献

内田尚孝（2013）「察哈爾をめぐる日中関係—土肥原泰徳純協定成立過程」『同志社大学学術リポジトリ』
2号：91-117。

及川琢英（2019）『帝国日本の大陸政策と満洲国軍』東京：吉川弘文館。

江夏由樹・中身立夫・西村成雄・山本有造（2005）『近代中国東北地域史研究の新視角』東京：山川出版社。

鈴木仁麗（2012）『満洲国と内モンゴル—満蒙政策から興安省統治へ』東京：明石書店。

麻田雅文（2012）『中東鉄道経営史—ロシアと「満洲」1896-1935』名古屋：名古屋大学出版社。

加藤陽子（2007）『満州事変から日中戦争へ』東京：岩波新書。

中見立夫（1976）「ハイサンとオタイ」『東洋学報』57-1・2:125-170。

白那日蘇（2020）「蒙疆政権における漢人部隊移管問題」『日本とモンゴル』54、139・140号合：156-171。

福井雄三（2009）『板垣征四郎と石原莞爾』東京：PHP研究所。

ブレンサイン、ボルジギン（2003）『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』東京：風間書房。

森久男（編）（1994）『徳王自伝』東京：岩波書店。

森久男（2000）『徳王の研究』東京：創土社。

森久男（2009）『日本陸軍と内蒙工作』東京：講談社。

楊海英（2018）『最後の馬賊』東京：講談社。

中国語研究文献

刘绪功 郑良台 主编（2009）『多伦县军事志』呼和浩特：内蒙古大学出版社。

政协多伦县文史委员会 任月海 编译（2006）『多伦文史资料』呼和浩特：内蒙古大学出版社。

朱璧 / 主编（2018）伪蒙疆政权时期的『巴彦塔拉盟』桂林：广西师范大学出版社。

朱璧 / 主编（2018）『日伪统治时期的归绥』桂林：广西师范大学出版社。

金海（2005）『日本占領時期内蒙古歴史研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社。